

企業名： 芙蓉総合リース株式会社

レポート名： 芙蓉総合リース株式会社統合報告書 2025

1. この会社が目指す姿が理解できるか（将来）

芙蓉総合リース株式会社は“前例のない場所へ”というコーポレートスローガンを掲げ、役職員が行動指針を共有し実践することを行動指針とし、コーポレートスローガンの実現性を高めている。そして、「社員の挑戦と成長を後押し」することで顧客のニーズを把握し、付加価値の高いサービスを提供することにより顧客との相互信頼を高め様々な価値を創造し続け（「相互信頼と共創」）、その先の「社会問題の解決」を実現するという三つのステップを実現したい姿として提示している。これらの段階を踏み、事業の領域拡大とさらなる進化による 新たな価値創造に果敢に挑戦し、 豊かな社会の実現と持続的な成長に貢献するという使命を果たそうと努めている。芙蓉総合リース株式会社の統合報告書では、この価値創造ストーリーを冒頭で図と端的な文章で説明したうえで、後のページでより詳細に説明を加えるという構造をとっており、会社の目指す姿の理解が容易であった。ご提示いただいた文章の概要を、3つのポイントに要請を絞って簡潔にまとめました。また、過去三年間を振り返り、今後の戦略分野について、財務・非財務目標の最適化と見直しや新たな事業領域への積極的挑戦、将来の持続的成長に向けた布石を今後二年間戦略立てていることも丁寧に説明されていた。また、社会問題の解決については、それぞれの分野で 2030 年のありたい姿が述べられており、各部門の目標が明確化していることを読み取ることができ良かった。

2. この会社の競争優位性が理解できるか（現在）

「2018 年には事業活動で消費する電力を 100%再生エネルギーで調達することを目標に掲げる国際的な企業連合である「RE100」に、総合リース会社として初めて加盟しました」という記載より、社会課題の解決と企業価値の向上を同時に実現する CSV(共創価値の創造)を組織的に強く意識している点で競争優位性を確保しているのではないかと理解した。また、環境への配慮や社会問題への解決に取り組んでおり、エネルギー環境・BPO/ICT・モビリティ/ロジスティクス・ヘルスケア・不動産・航空機・インキュベーション・新領域へアプローチをしている。これらの点で競合他社との差別化を図っているのではないかと理解した。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか（変化）

「CSV(共創価値の創造)を推し進めて Value(行動指針)を体現していくことで Vision/Mission（使命/存在意義や実現したい姿）につながっていく一連のベクトルを組織全体で共有する活動の積み重ねが、いち早く世の中の変化の兆しをとらえた、顧客との信頼と共創につながる企業行動であり、当社グループの持続的成長への道筋であると考えている」という文章から、芙蓉総合リース株式会社は顧客との共創価値の創造に重きを置いており、長期的かつ安定的に株主還元を行う基本方針の下で事業規模の拡大と資産効率の改善に取り組むことで、自己資本充実と資本効率向上のバランスを取り、柔軟な対応をして持続的な成長をしていることが読み取れた。また、いかに競争優位性を持続するかというアプローチ方法も述べられていた。繰り返し言及されていることにより、変化する外部環境へ柔軟な対応との社会課題の解決を通じた非財務面での価値創造を同時に実現する CSV の考え方を軸に、今後も持続的な成長を推進していく方針を読み取ることができ、企業の核となる考え方や持続性がよく伝わった。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

芙蓉総合リース株式会社は事業領域ごとの高い専門性を有し、高付加価値を創出する人材や自ら積極的に行動し、成長意欲を持った自律した人材を育成する構造が整っていることがうかがえた。リース・ファイナンスに必要な会計・税務・法務などの知識や、コミュニケーション・思考力等の一般的なビジネススキル、語学や DX、先鋭的なファイナンス等、全事業領域において必要かつ付加価値創出を底上げするためのスキル、エネルギー、BPO、ヘルスケア等の事業領域ごとの高い付加価値の源泉となる専門的なスキルの 3 段階のスキルが身につけられるよう人材育成が行われている。さらに、マネジメント職対象のコーチング研修をするプログラムや通信教育や e ラーニング、語学・資格スクール、ビジネススクールへの通学など多様なメニューから社員が自ら選択し、受講料を支援する制度が用意されており、芙蓉総合リース株式会社は自身の人的資本の価値向上をするために整備された環境であると読み取れる。高付加価値を算出する人材や自ら積極的に行動し、成長意欲を持った自律した人材を育成の育成についての説明で、実施事項だけでなく成果もまとめられており、説得力があった。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

冒頭で端的に企業の核となる精神や事業の方針について、図を用いてまとめた後、丁寧かつ

具体的にその中身を紐解く構造が非常にわかりやすい。CSV を重視する一貫した考え方の元で、社会課題をどのように解決するのかという点について様々な方面からのアプローチ方法やその実績をまとめた上でコーポレート・ガバナンスや財務情報について開示しており、読みやすい作りであった。改善点を挙げるとすれば、芙蓉総合リース株式会社は航空機や建物など様々な分野に事業領域を展開していることが読み取れたが、特にどの事業が利益成長に繋がっているのかといったことなどは見えづらかったため、投資家が現在の市場の流行や動向をもとに将来性について判断するとすれば、その判断材料として、特に力のある事業を示すことも有用なのではないかと考えた。ただし、全体として非常にわかりやすい構成であるとともに一貫した方針が伝わる統合報告書であったように感じる。

参考文献

芙蓉総合リース株式会社．芙蓉リースグループ 統合報告書 ．【発行年：2025】，
https://ssl4.eir-parts.net/doc/8424/ir_material_for_fiscal_ym5/186317/00.pdf, （参照
2026-05-29）.